

## 宮島

池松 孝子

宮島には古くからの友人がいて、これまでも何度か訪ねたことがある。今回は数年ぶりだったが、ご多分にもれず外国人観光客の増加は想像以上だった。

厳島潮満ちたらし海中と鳥居ひたりて鹿あがる見ゆ

わたなか

北原 白秋

宮島は太古より自然崇拜の島であった。国有林を管理する林野庁、国立公園を管理する環境省は「宮島」を、国土地理院は「厳島」を用いる。さらに町制施行時には「厳島」であったが、第二次世界大戦後には「宮島」へ変更された。学術書、公文書では「厳島」が、観光振興に係わる行政文書では「宮島」が使われる。旅行ガイドブックなどでは意図的に「厳島」を使う。後者の方が荘厳さを演出することができるかららしい。町制では広島県廿日市市宮島町の島だ。

大同元年（806）弘法大師が唐から帰国、京へ向う途中、島に御堂を建て修行した。この時の火は「消えずの火」として今なお燃え続けている。久安2年（1146）平清盛は安芸守に命ぜられた。厳島神社を造営すれば位階を極めるといふ夢枕の示現を深く信仰し、法華経の写本（平家納経）、甲冑、京の美術工芸品などを奉納し、庇護したことから都の文化が宮島に移った。以後、後白河上皇、高倉上皇なども参拝している。

信仰の島である宮島には血、死に係わる独特の風習が残っている。島に死人が出る和对岸に運び、遺族は喪が明けるまで島に戻れない。島には墓を築いてはならない。よって今も墓地は存在しない。また、「血の穢れ」は厳しく、産気づいた時点で対岸に渡り百日を過ごして島に戻る。さらに農業は鉄の農機具を土に刺すことから島での耕作は禁じられた。これらは第二次世界大戦後まで続いた。

一方、太古から島に生息した鹿は、奈良の春日大社の神鹿思想の影響を受けて神の使いとして今も大切にされている。友人の家では鹿が家に入らないよう「鹿戸」を立てたり、犬を飼わなかったりと神聖な神の使いを守る日常はそのままだった。